



繪本小栗外傳

三篇

四

^ 13
3249
6



13
3249
6

馬

神六

昭和十一年一月二十四日 神求

神蔵

寒燈夜話

小栗外傳卷之十四

東都

絳山戲編

第廿四編

勇威龍を走して亡鏡を復せ
仁惠士を憐みて旧室を見給

ら小栗助重ハ將軍家より一色詮秀を討るべき御教書とテ諸人暫向ふ
主從京師出しと義量公薨去あり世間の人公之語氷火踏のふひし
騒くあり何れも便多き人もなく皆く世の動靜を窺ひし
普道院の門主我圓傍云還俗ありて義宣云と号しむ征夷の軍を承
く世の漸く徳みたるはつらみ幾行きや京都鎌倉れおん中不
世間再び不静溢るりあり柳京源公確執の監勝入りなれ
我持公去る應永二十年の二月征夷大將軍職を辞し

箕裘を譲り。四月上旬は落飾り。世に道は静。天年保入と云はし。
 同三十二年二月廿七日。我量公世を早。多しぬ。いさ。は。十。
 道号ハ翠山法名ハ道基長徒院殿と。り。僅。合。梅。の。氣。従。ひ。
 出。を。行。は。して。忽。ち。一。朝。の。風。散。失。多。を。憐。ら。り。天。下。の。憂。ひ。ら。く。極。つ。
 さ。ら。う。暗。夜。に。燈。火。を。打。消。し。は。ん。比。と。れ。り。父。義。持。公。の。は。僕。き。や。り。て。死。
 せ。ら。る。は。猶。さ。ら。外。に。世。嗣。を。支。た。さ。し。き。違。も。在。ま。ら。ぬ。ら。ん。公。裡。に。か。か。
 ら。ぬ。は。物。思。ひ。し。代。を。知。る。め。き。君。を。な。く。て。い。う。て。天。下。を。治。む。ま。と。あ。ら。や。わ。
 は。け。は。先。祖。の。氏。公。の。定。め。あ。ま。り。も。あ。れ。の。源。倉。左。馬。頭。殿。の。弟。公。連。
 賢。王。と。の。を。名。子。と。し。天。下。の。權。政。を。譲。り。多。う。ん。と。後。領。領。人。の。輩。と。は。内。評。
 の。り。多。う。後。領。畠。山。尾。後。満。家。を。と。り。山。名。赤。松。以。下。の。諸。臣。等。此。年。
 然。る。と。く。人。も。な。く。危。角。月。日。辛。未。ら。ち。我。持。公。は。物。思。ひ。の。積。り。心。地。

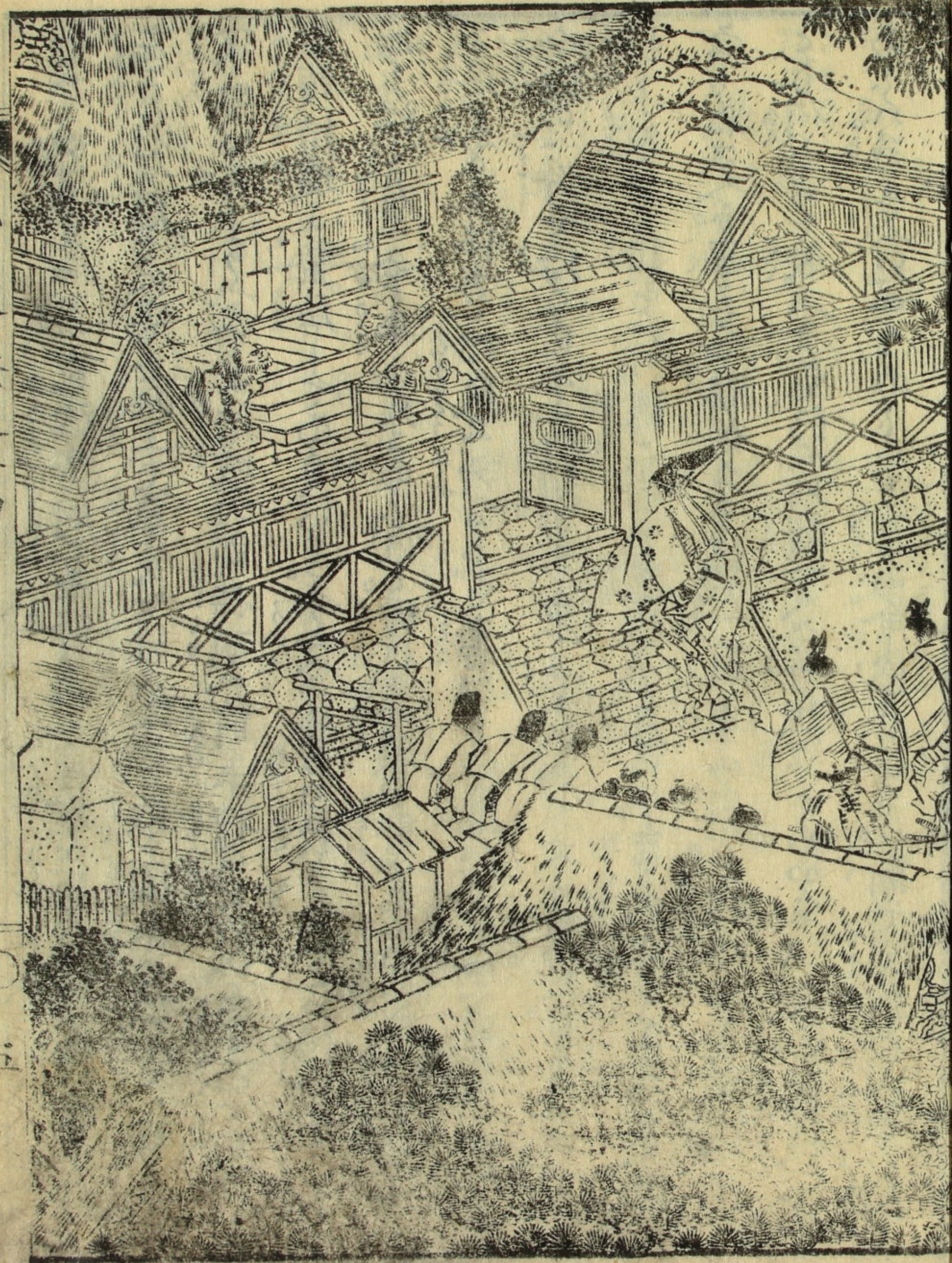
例。あ。ら。う。と。い。ふ。へ。正。長。元。年。一。月。廿。七。日。あ。ま。り。小。重。ら。せ。め。し。今。と。や。
 今。世。の。教。と。少。く。と。入。り。同。十。七。日。後。領。畠。山。満。家。石。清水。と。名。子。丹。城。の。
 勤。行。を。い。じ。や。ま。れ。る。は。今。前。の。軍。我。持。公。の。病。い。と。危。く。一。朝。の。露。と。も。
 消。さ。せ。る。や。天。下。と。を。み。と。り。万。民。の。嘆。れ。幾。許。や。僕。才。不。肖。多。り。と。い。
 う。と。後。領。の。職。と。し。て。足。を。患。え。ん。や。柳。為。社。の。源。家。意。護。も。在。り。せ。り。
 仰。顔。く。か。意。敗。を。た。れ。も。い。今。ら。ん。中。外。の。二。人。の。名。の。ら。何。れ。と。君。に。し。は。る。
 る。と。ん。只。神。意。お。ま。じ。り。多。し。世。嗣。の。公。を。定。め。天。下。の。人。を。救。ひ。ま。ら。せ。よ。
 二。人。の。君。と。り。前。大。樹。の。山。舎。竹。青。蓮。院。の。山。門。主。今。一。人。の。後。倉。殿。の。公。連。
 賢。王。九。殿。と。此。二。方。の。名。次。記。神。前。は。捧。持。し。も。その。宣。ま。り。は。い。ふ。と。い。ふ。と。
 心。圖。と。し。丹。城。と。ら。し。て。心。圖。を。取。り。三。夜。に。及。ぶ。と。我。圖。僧。正。の。法。名。
 の。を。い。は。る。け。る。足。は。と。神。意。お。け。り。と。ま。す。り。下。向。柳。為。社。の。意。護。を。

下。め。緒。老。臣。小。斯。と。生。り。ふ。こ。し。み。神。意。の。指。と。し。て。い。う。て。疑。ふ。事。な。ら。ば。と。辨。定。
 これ。一。度。き。か。は。れ。久。し。御。日。午。刻。前。お。軍。を。持。た。る。は。年。廿。四。少。く。述。法。に。お。か。
 同。之。月。十。一。日。ふ。我。圓。修。心。を。還。俗。せ。り。も。義。宣。公。と。を。号。し。る。お。お。軍。
 義。持。公。少。少。同。母。の。法。全。身。を。幼。女。青。蓮。院。門。主。の。室。に。入。り。出。家。し。て。名。を。ひ。
 義。圓。と。号。し。たり。天台。四。明。の。法。水。を。汲。て。自。解。公。宗。の。妙。理。を。究。意。し。止。観。二。
 諦。の。教。門。を。開。き。て。法。法。実。相。の。深。意。も。達。し。内。外。二。典。も。通。じ。詩。歌。及。び。
 書。算。一。山。の。明。師。と。な。り。多。く。之。れ。は。才。力。り。と。れ。帝。が。き。り。好。く。信。敬。ま。し。く。て。
 大。傍。に。任。じ。准。后。の。宣。旨。さ。か。う。り。門。主。の。怨。ま。入。り。天台。府。主。と。成。り。ひ。え。
 俗。性。と。し。ひ。俗。位。と。し。ひ。今。還。俗。あり。て。天。下。の。權。を。執。り。も。俗。の。不。足。り。お。し。
 ま。さ。之。れ。が。て。陳。廢。の。宣。下。あり。小。除。目。を。と。り。れ。從。五。位。下。に。叙。し。左。馬。路。の。
 任。せ。り。は。今。年。三。十。七。之。斯。波。左。兵。衛。佐。義。淳。再。ひ。復。願。は。任。せ。り。と。京。都。

一。つ。緒。の。緒。お。の。く。お。び。て。る。と。永。享。元。年。三。月。十。五。日。冬。三。儀。兼。左。近。
 衛。中。將。に。任。じ。征。夷。大。お。軍。お。補。せ。り。れ。ひ。名。を。改。め。り。從。三。位。下。叙。せ。
 り。は。以。錄。出。仕。の。輩。を。行。改。入。の。作法。み。り。が。じ。れ。を。削。り。外。振。伺。公。の。族。
 ナ。を。法。信。の。行。跡。を。ま。ら。と。禁。じ。も。ひ。一。つ。自。ら。正。道。を。復。し。皆。篤。實。に。改。
 々。れ。れ。我。ね。と。り。め。れ。風。俗。齊。淳。厚。靜。溢。の。世。と。な。り。に。なる。お。軍。より。教。を。
 既。に。世。に。傳。へ。ひ。天。下。の。政。道。を。執。行。し。せ。り。及。び。鎌。倉。の。左。近。將。持。氏。公。
 送。り。此。事。を。父。世。に。人。も。な。り。ひ。法。師。を。て。お。軍。職。と。な。し。て。是。何。の。乃。評。を。
 若。京。都。お。軍。家。終。ん。と。せ。り。謙。倉。より。これ。を。継。と。上。祖。尊。氏。公。定。め。り。入。り。お。
 ある。お。し。深。く。怨。み。惜。り。これ。より。京。都。を。背。く。を。萌。り。ひ。ね。從。昔。基。氏。公。
 述。去。の。後。送。言。は。し。り。て。氏。滿。法。兼。持。氏。ま。て。ま。京。都。の。乃。評。を。元。服。を。
 多。し。お。軍。家。の。以。諱。の。一。字。を。揚。ぐ。と。り。し。は。這。回。持。氏。公。れ。痛。男。賢。王。丸。殿。

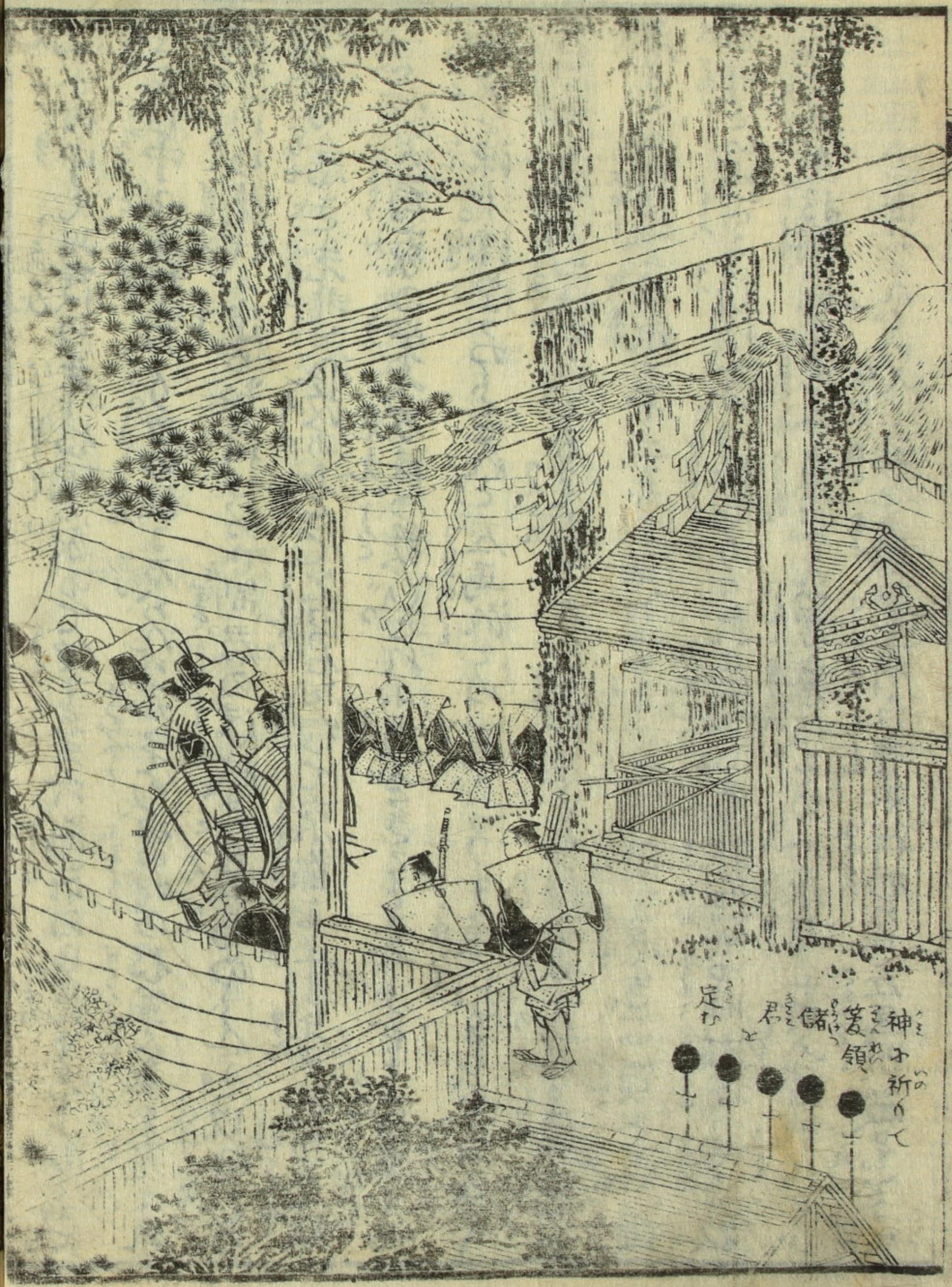
元服の沙汰ありし持氏に京都を賞く意頻なれば世々の例ありきと
 古八幡を所我京の佳例は任せんと鶴岡八幡宮の宝室ありて慶王丸
 どの初冠せしむ義久と名号ありて執行家牧安房の憲実を以て
 大に敬ふは俄に御前あり持氏に奉じ侍をせしむは先例あり
 元弘建武の乱を静め天下を統一し御軍家を京都に遷し君臣守護し
 たりし五畿七道を治めり然るに園本邊郡中して王化も届くは付と
 るる乱逆の徒ありては次男基氏を以て鎌倉に遷し其後を失じ
 治めしむこれ昇平を長しなりと人討滅しされば代其後を失じ
 鎌倉の嫡男を京都に上し御軍家を鳥帽子親とし一字を賜ふ
 たり然るに今君先規の佳例を廢し權は賢王九殿を鶴岡八幡宮の宝室
 中して元服ありしむ名を自ら付するはこれ何の所んや京海念の

親子の中へ此度の半御軍家をして受しめざるは水の水なるか
 忽ち中にも和となり世の乱及らんは定む當時の御軍家をたされ
 られし先代は定めおられけるは制君のほは復易ゆんといの外乃
 りゆ急ぎ先非を改めありて是を御を以て京都に上しむは元服
 のんぬる自家の榮え万民の致むこれお過る事こそとせむと尚まの
 事をも陳し陳れしめられと左馬氏の露をりも兼りありと
 憲実を疎し先仕とせしむるも是を悉しありとかくは安房守藩會の
 居るに影護を承承三十二年八月十四日山の内は鼓を退き正領上野園
 白井といふは後し一族なりは扇谷の家牧治給浦村定の子は牧
 後氏土佐村同なる今憲光は次男憲信その外永井二所入道那須と
 小山田小田郎か入どの人跡を慕ひ上州白井小行加り左馬改殿とて



五ノ下

五



小栗卷之十四

神子祈りて
足正
君儲
領

いよ、怒り多しと一色詮秀討ておぼれと云流を巧まき小流言へれば。
 左より怒り多しに堪へて此上の憲実を誅せんと俄、関東の流は觸れなく。
 軍勢を言へば、結城六郎持朝へ前年持氏の色と蒙あり。
 而領結城は誓居してありける。今度の信召の教に入ぬるゆへも是非を
 知る程と君の命垂るるゆへに、權代恩顧の郎黨を引俱し。一色は流給
 小走まりて、信也も持氏と斜まると喜び多し。急死し、命をおん免りありて。
 今回の一件を語り、持朝下めて是を知らず、大に驚れども、一色が
 勅中知ると、猜され、誅せんと思ひ、君の色も色止り、あつた光景
 あるぬ、事や徳便り、後、一將車の火を一杯のあつて消へると
 とも、何ぞよく救ふを、おぼれた我一人の力に、以てらるる、一色は、
 あつた、おぼれた、君の命に、まけ、斯て、関東の流、の、高、

いよ、怒り多しと一色詮秀討ておぼれと云流を巧まき小流言へれば。
 左より怒り多しに堪へて此上の憲実を誅せんと俄、関東の流は觸れなく。
 軍勢を言へば、結城六郎持朝へ前年持氏の色と蒙あり。
 而領結城は誓居してありける。今度の信召の教に入ぬるゆへも是非を
 知る程と君の命垂るるゆへに、權代恩顧の郎黨を引俱し。一色は流給
 小走まりて、信也も持氏と斜まると喜び多し。急死し、命をおん免りありて。
 今回の一件を語り、持朝下めて是を知らず、大に驚れども、一色が
 勅中知ると、猜され、誅せんと思ひ、君の色も色止り、あつた光景
 あるぬ、事や徳便り、後、一將車の火を一杯のあつて消へると
 とも、何ぞよく救ふを、おぼれた我一人の力に、以てらるる、一色は、
 あつた、おぼれた、君の命に、まけ、斯て、関東の流、の、高、

のうちにさすえぬものごとく、源氏へ下し、まひ持氏は、親諭し、和達を養育し
 まらん、と万全の計のしるきや、と傳る。処なく、速く君が、しむ、然臣は、依成る
 色して、評議、こまごま、まじり、く、の、維、と、大、ね、と、家、校、を、救、れ、と、あり、る、給、ふ、古
 家、校、源、秀、次、男、中、務、大、輔、持、房、の、前、年、父、源、秀、次、亡、び、右、京、か、ま、り、
 右、軍、家、の、代、進、習、目、に、仕、り、け、り、は、か、今、夜、の、評、議、を、受、け、き、う、を、伺、て、了、く、ら、ぬ
 左、の、源、氏、の、正、一、父、源、秀、次、を、欲、か、つ、て、お、た、ま、し、ま、し、と、い、は、し、る、前、年、あ、ま、の、意、秋
 教、訓、の、ま、く、し、前、年、の、出、内、意、を、世、承、り、因、亦、を、察、し、し、る、と、奉、を、果、ま、と、刺、え
 源、氏、へ、の、ま、え、を、傳、り、し、し、所、領、を、取、放、ま、し、り、身、亦、か、か、も、か、ま、を、ま、し、ら、ぬ、
 又、お、て、の、僕、係、り、の、ご、せ、ご、今、日、ま、て、あ、ら、し、と、い、は、し、る、云、甲、斐、々、と、い、は、し、一、世、の
 乱、を、ま、か、り、思、ひ、忍、び、て、か、い、今、源、氏、後、の、光、景、京、都、を、獲、ま、し、る、と、せ、ま、え、
 私、は、ま、り、る、實、事、ら、ん、君、を、救、意、室、を、救、ひ、ま、り、ん、と、其、お、を、獲、ま、し、る、と、い、は、し、ら、ぬ、

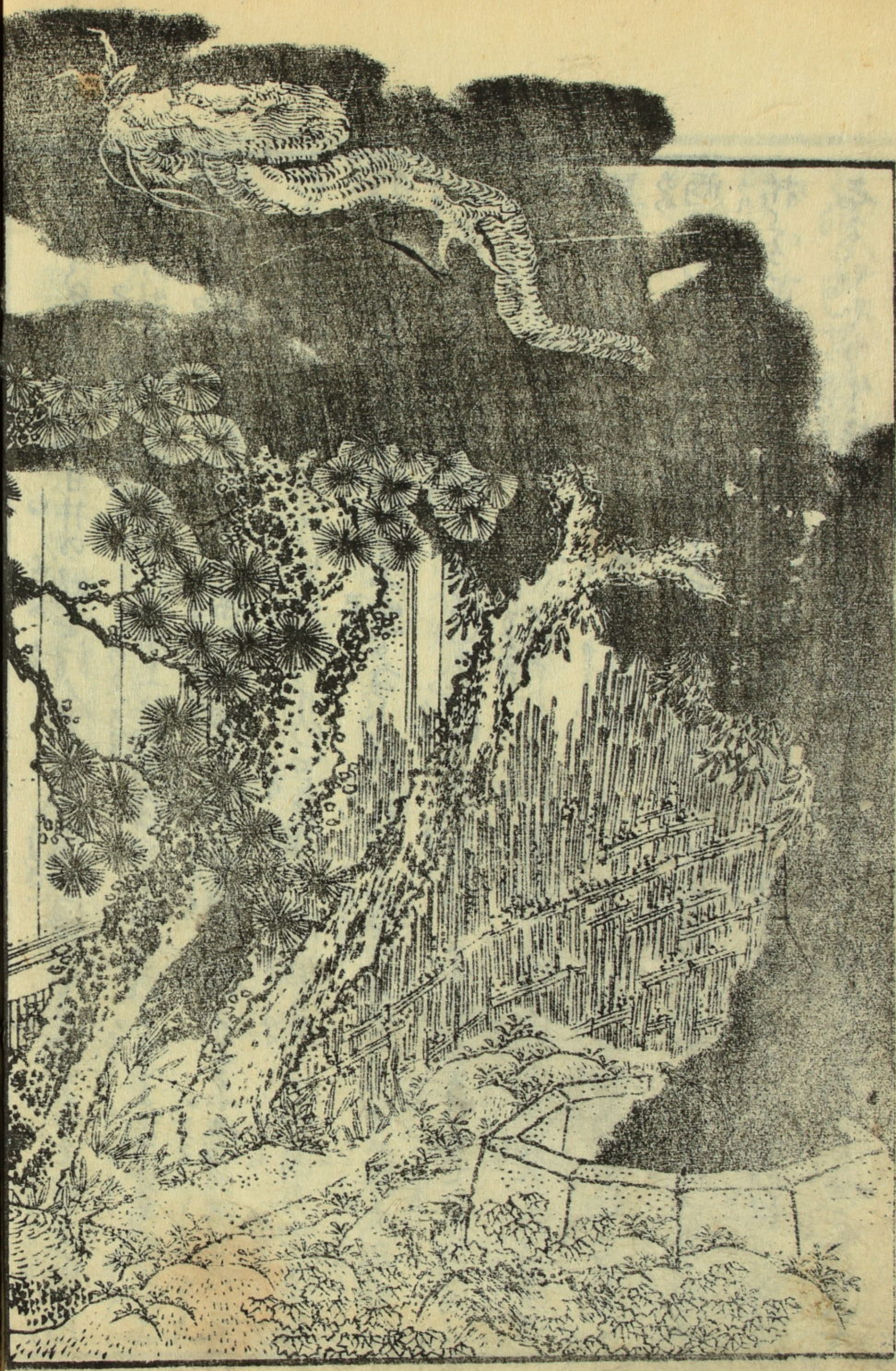
身不肖なりと、い、く、も、一、回、源、氏、後、に、對、ひ、ら、矢、及、び、父、に、對、し、て、孝、あり、
 且、憲、室、へ、一、家、を、を、救、め、て、我、之、足、彼、の、ゆ、は、ら、ぬ、あ、れ、は、
 衆、り、て、ま、る、速、く、並、り、源、氏、代、善、好、の、輩、を、招、け、り、若、干、の、軍、勢、も、い、り、ん
 其、勢、ひ、を、將、て、家、校、を、救、ひ、父、入、道、が、泉、下、の、憤、つ、を、晴、し、や、た、し、と、嘆、け、れ、
 右、軍、家、も、其、正、心、を、憐、れ、お、か、し、後、又、へ、ら、る、源、氏、の、政、道、終、正、し、る、秘、
 因、亦、の、法、國、穩、ち、る、を、今、既、に、乱、邦、と、い、は、れ、り、さ、し、と、速、く、勢、力、を、
 持、を、討、て、その、罪、を、お、と、し、と、想、へ、我、世、次、治、り、の、始、み、と、み、づ、り、軍、勢、は、
 配、さん、と、然、り、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、
 仍、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、
 一、身、の、力、を、り、て、源、氏、を、傾、た、ん、の、ま、束、は、た、家、校、を、救、め、り、て、公、に、ま、り、
 若、源、氏、の、法、を、持、氏、を、救、れ、り、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、と、い、は、し、る、

宿志を遂よと蜜は旗ふは教書とそへ賜りじくが坊かきりなくたじひ
ふく君恩を感佩し急手家へ還りて只顧園をへりる準備せりこふ
小栗助平の普く洛外八塩山の四ふ思ひ居りしが関東の乱は又さふ
家叔坊房が軍衣の内を直して憲実を救ふはとせしめてその
便宜を索りたり然るに近以天下早くと加茂川の流も涸るるなりけり
洛中洛外の井悉く涸るれが小栗が旅館の裏の一の古井あり常水
盤のぶくはくして其源さ斗さしてせられども此井も神あるははたそく
汲となぐてありが今早魁の付されども水尚溢るるなりけり近隣より
汲とるもの多しされども人へかて汲故もや濁るるものもなりけり一日乃夕
小栗夫婦結より旅宿の前裁おせり垣の外面をうららるる隣家の婢女

水を汲んじ彼井お珍まみりる何をうらるる水汲まで井の裡を窺居る
何ふととと尚らるるふ忽ち身を翻して井中墜入り夫婦お驚り人
味お近隣らち集りて助んとせれども及らとせめて死を召す井を
汲干んと後日人力とせせと水涸るるを三日お至れども此も水の
減せられ人々恐怖し此井も神の在を知らずみたり汲るるは
斯る咎を稟しるる死を召ると尚強く汲り又らるる討する者お人
不如止めんとて是より井圍垣を結て人をし井より近づく者を池の
庄司にこれを怪しむ夫神の人を助るにて出ひかりふ今天下早く水を
患ひ瀕近此井の水を汲りて出をなすは必死神ありはた
悪の蛇なると居を止しなると此後怪しめりぬと忽ち打殺しつた
除んとこれより日毎彼井の妖を窺ふる雨之日をさる夕晚井の垣に

と涙のほし其苦痛を堪へ止まらして或る色とりて感す。又ハ我室を後して
 騙し人を懸死溺し入る。毒杯の食ふともふ供を驚かす内の人池庄司
 助長昨日井の辺に事ありをその知らばて例の色とりて欺んとせし。知勇の
 助長毒を好くと猪一刃の下に殺んとせし。驚かすは逃失はれ助長
 勇に思ひ井へ入る。妖怪を殺さんとて毒龍を勇威を恐怖し。昨夜
 俄ハ此地方を去り其行末を知らばとてあわわく妻辛苦を脱し。雨あれ
 腥穢ぬ場と今井中毒移居らざれば少く人口を用ひ。忽ち水涸ゆん
 りふ井中の昔のみを脱し昔の如く君の左右に侍らばり。まは恩を
 報ひはぬとせんと云終るてまよと想ふ。愕然として甦醒する。され楠柯の
 一夢なるに姫と奇異のありしを。助長あはれと告る。其甚不實て庄司
 を召し。妻の夢中のるゆもを詳ふ。まは庄司井の傍中。美人を

入るるゆもにして今日井の妖を討んと志のほどを述るゆもを。照天姫乃
 ち中の子。恰も符合する。此上の疑あるまはあはれとまは。郎堂の人も
 命せし。井をあがし。しるふ。忽ち水涸る。中を捜す。不詳の婢女の死
 あり。其の白骨疊々。是等のゆもを除く。尚底に至る。ふ一固の古鏡を
 びりり泥まみみれ。形も不定。まは。熟く濯ぎ。めて。照天姫前ふ
 小少へへる。八枚の鏡をのり。限りあり。まは。匣にまはめて。秘せらる。
 此のゆも。誰か。まは。口順。まは。將軍家。これを。及。近日の
 早天下の。まは。君。高僧。勅あり。と。
 西の祈を。其。古井の。一夜の。まは。
 柘。再生。萬井水。加。天。まは。
 まは。旅人。古鏡何の。まは。



云鏡の
精
夢
照天
見
井中の
若
所

照天

鏡精

小栗卷之十四

ところかどい。玄宗帝。觀鏡のりて甚異し。と本す。卷中同さう。則ち勅答
 志行。此鏡ハ揚州。呂暉と。鏡匠のひが。一日鏡ハ法んと。世付。白衣を
 多。老翁。羽衣を。童を。俱して。呂暉。許す。ある。その。髪。須
 悉く。白く。眉。垂く。有。ま。ま。の。自ら。名。告。く。い。我。性。龍。名。ハ。護。し。云。て。こ
 付。童。子。ハ。玄。冥。と。呼。ぶ。我。真。龍。鏡。を。造。る。こ。を。許。す。今。汝。が。と。ん。ふ
 これ。を。渡。て。帝。の。意。再。愜。ん。と。也。此。処。を。去。る。と。戸。外。は。牛。一。小。童。去。冥。と。も。ま
 爐。亦。入。り。戸。を。扃。居。と。三日。也。て。戸。を。開。き。り。呂。暉。行。入。り。く。入。り。と。法。渡
 玄。冥。の。所。在。な。り。只。爐。の。前。一。紙。の。書。あり。あ。れ。を。開。く。と。曰。開。元。皇。帝。聖
 通。神。靈。吾。遂。降。社。可。辟。衆。邪。鑒。萬。物。泰。皇。之。鏡。無。以。加。焉。歌。曰
 盤。龍。々々。隱。於。鏡。中。分。野。有。象。變。化。無。窮。興。雲。吐。霧。行。雨。生。風
 上。清。仙。子。來。獻。聖。聰。呂。暉。統。平。く。爐。を。移。して。五月。五日。揚。子。江。心。小

ち。あ。く。誘。へ。り。ぬ。と。い。へ。の。げ。く。帝。を。ひ。ま。ひ。これ。を。長。室。に。し。め。其。後
 天下。旱。の。附。水。心。鏡。と。疑。陰。殿。に。安置。し。雨。を。祈。る。須。臾。み。て。甘。雨。大
 小。謝。し。帝。これ。より。ま。ご。く。此。鏡。を。愛。り。し。が。後。水。心。鏡。を。傳。へ。て。一。面
 の。鏡。を。造。り。愛。如。揚。貴。妃。に。賜。ひ。し。此。鏡。あり。その。け。ち。安。保。山。の。乱。再
 揚。貴。妃。馬。塊。の。露。と。沈。し。附。此。鏡。の。所。在。と。知。ふ。と。なり。ぬ。を。こ。り。遠。の。星
 霜。を。行。く。我。國。に。泊。来。し。平。政。子。これ。を。送。り。秘。葬。せ。り。と。傳。ふ。今。こ。の。鏡
 こと。の。不。思。議。さ。よ。近。日。の。大。旱。に。高。僧。の。祈。り。甲。斐。さ。り。り。此。鏡。の。故。事
 よ。て。甘。雨。降。り。て。民生。の。ま。び。と。ほ。ほ。れ。ば。真。の。水。心。鏡。也。異。と。は。一。層。を。こ。い
 天下。再。易。ある。宝。かり。民。の。父母。さ。り。の。持。を。死。よ。あ。ま。て。汝。毒。毒。の。り。乃。ゆ
 之。を。放。し。其。去。向。を。知。ら。ば。と。い。へ。と。再。ひ。し。故。に。復。る。及。ひ。し。や。其。の。相。心。成
 遂。さ。と。と。大。々。と。好。む。靈。鏡。な。れ。我。こ。こ。に。在。る。こ。り。又。改。め。り。と。その

落きんとして討死し照天を夫と負ひて僅に脱ぎ了ふ孫次の上人は還き
 教ゆまじし助言を坐行車かきまゐりて熊野の本宮の湯に入て病平愈の
 こと九人の郎黨を尋ひ取りまよりの京師へ出池庄司が勇威およんで後境
 再ひ訪りて又境の奇特ゆゑ將軍家おん系し御免とせ給ひおぼせ
 傷まぬ國へ赴くこと母至るまで語りたまふ小左郎は伯父の死を嘆き主の
 高運をうらむに庄司が勇境の奇特と感しなれ斯くも青柳を照天
 姫おひりひてまゐりてあはれ妻を慕ふありし時姫君もこの母おぼせし
 此身の上は知らざればおれに限りなきは終今とまりて其罪逃るる處
 もゆゑをば前よあるも畏くて消も入りて付れども父の仇人横山と怨むる
 そらちの仇おれを慕ひに尚其上の怨むる姫君は討つるべしおれは
 僕しとまゐる此人もかれば恩なり君は本意を遂るる后は怨人横山と

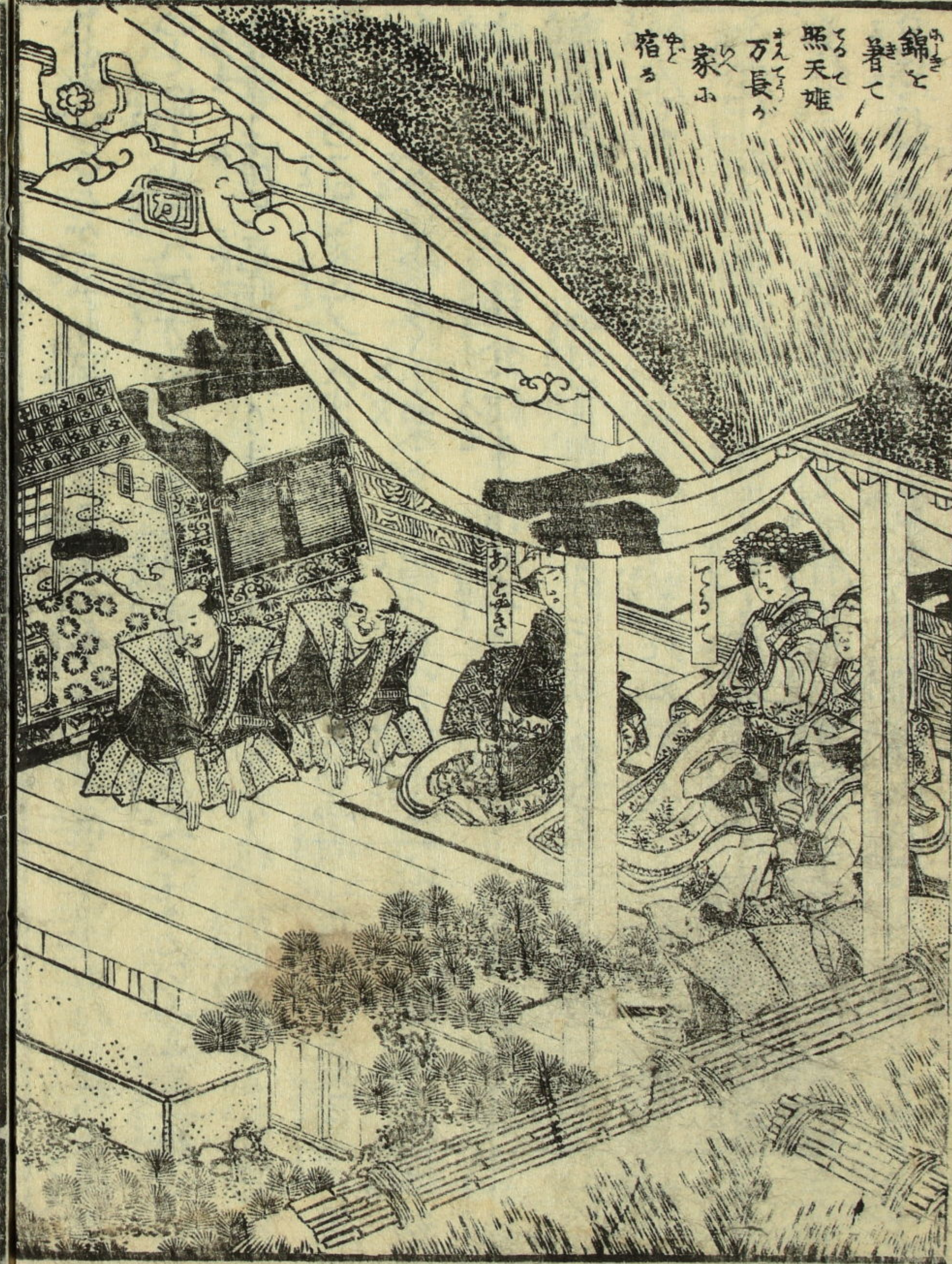
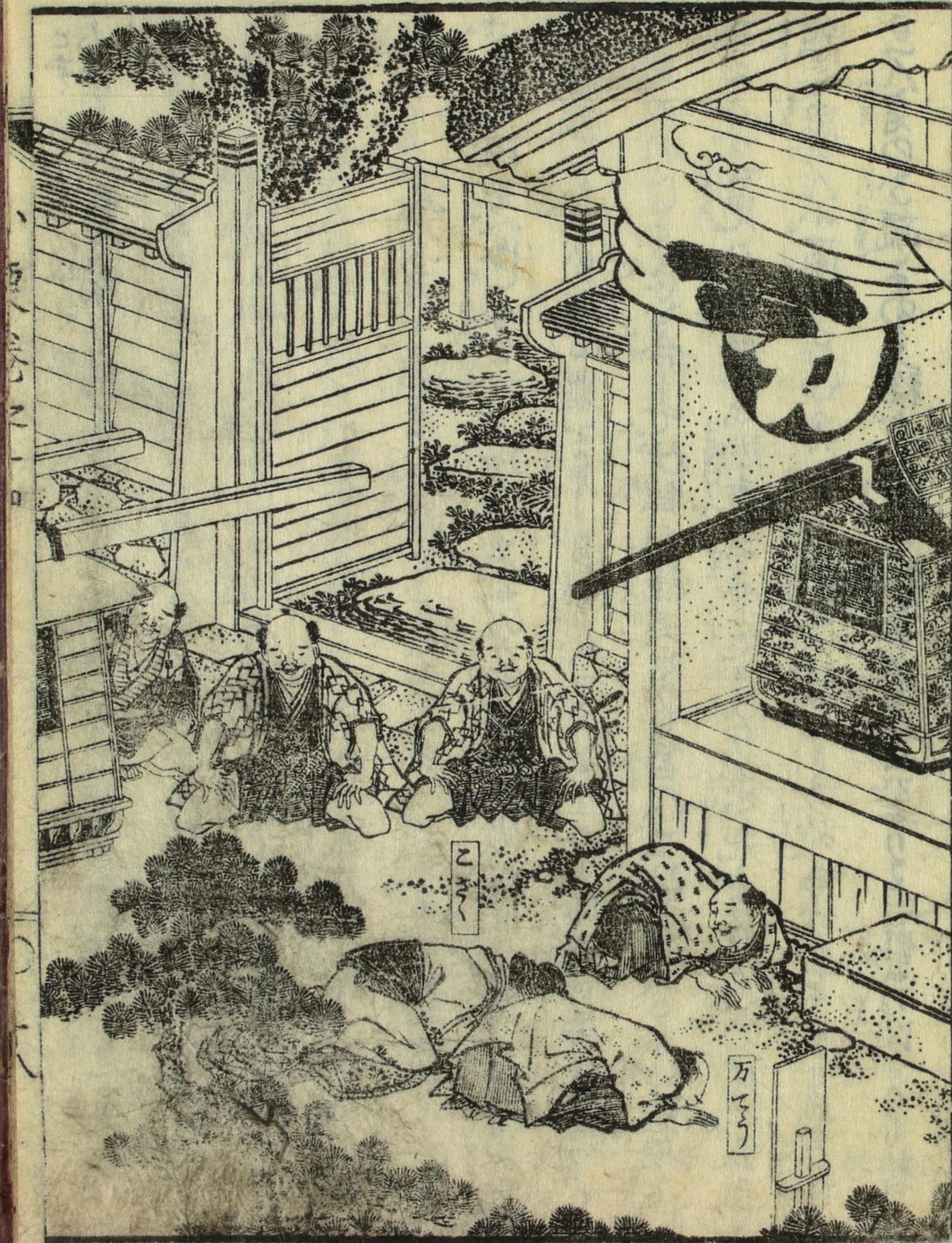
一太刀死せしやとならばいふな体罪も伏し侍らん斯道はなれりか
 願きもはば恐れあれと人の予するの道とせよ公底を傾けて父へあけ
 ちもふさと赤心とて速くもぞ照天姫へ父おはまされ不便のそふと
 憐るゝいふ前の非を咎んたゞ世縁のゆゑもせよ知らざるは詮せんは
 小四郎をりて想やしまひておことろ父とらるる下さぬの老はては恩を
 受しあふもたゞ仮初の君侍あり其子にわれがおぼせし知りあり
 とてこれをせしむるを知らざればとらるるをいふて咎んやうやの道み忠義と
 のひ汝が健幸の孝といひ比まれる事なればおぼせしは討つて仇討つ人
 ぞらふ爾もひねと云はばまふうち對ひいふはまゝいふらも此幸ねとせよ
 や。まゝも助重とて某おんを侍ひて舅の仇を横山と討てんぞいし
 うどいふせん陳中へ女を侍て行んとお房の身も入を憚らぬ公若く

ありけるが青柳おんふ伴われ行へしとて幸なれ我軍陣の殿より
 彼を便してするよし横山を討て至るべ我勢を以て加勢せん公強くお寄せ
 よしとて照天のさくふもりのとて青柳ゆくまひて小栗が好意を感佩
 せり斯く小栗助を發行の日もさりく美しく粧ひお房と伴
 京都を出東園さしてもゆきこれより前片岡に加次郎の主君の命を
 受て急いで下総まで走り豫て語らひ約する護代恩顧の老るもの
 去を告げられ人々大まふまひびりてや出陣の儀をせんとて我もくと登
 夜分を走上るほど近江は番場の驛ゆて助重は行遣り其
 人々岩津孫四郎長勝形原又七郎忠之竹谷市忠次長沢源兵衛
 重治三助次郎守助赤を止めとて都合言余人々の小栗とあ
 人々狐沼く龍の羽異を生せるがごとく威風凜凜としてつりつれ足を見

りの天晴の勇気やと感せぬりのこそさうりしてあふ青墓の驛なれ
 万長の這回鎌倉の討手と家持お房小栗助重のあお東山をとり
 処今日小栗が宿のものが家かると豫て縣守より余ありは馬
 仇をしとる小栗をねの禍を身おからんと戦き恐は慌忙を妻の小
 諫めらる小栗どのこと尋たうな人と前ふ云へ今日めくるん
 とあふる。そと難面なりまへ今さ悔めめとも甲斐はし爾あれかの
 人の義を幸とて人の奴家説まふとて一ひありその奈何となさる小栗
 どのの仮初うら一旦女婿となしけるまへあふ正妻照天姫とつる家の
 嬰婦となりて居りつれがこれらのことを以て嘆きやうさうては報
 らん人あまうよを恨しゆひそと肩心折うら下婢暴行走すらん
 さても不思議のことゆや去年去るべし青柳只今彼西もすりの内君あ

見人じと申ゆといふ小笹その不中敷きこつ好と云はるまき外方と云ふ
 一のりげかこゝの女肩輿を昇居多くの供へこれと圍りこゝらる人
 ぞと語はら青柳慌忙れびさして云いふ内君別とまひして后絶く
 此音同も承くざりし今恙あらぬ光景をこめていつたうの存か
 妻がとさそ怒りしあへ。これ後、妻が意よあふを早よついで妻に
 物治のゆがそつゆく笑へまわらせんはしあつりてはる今主と頼む人の
 京都より吾妻の赴たあつらる今夜の宿は此家おと命をへまされ
 こらうよく美引とあへといふ小笹の今扶助重の我家は宿はふ定めぬ
 他人を宿をせぬとていひに多し青柳あつち對ひく云入りたれおこが
 身の上の噂はまらおまね今夜の宿は素あつち方へ小栗殿の宿は
 を知りてのゆよはら又知ての幸ふや何手れ今申の宿はかあひ

中はもどとがらゆも同乳人と思と今ら方のはらつりぬれ其順備を
 いと聞。今何方居つるぞ其事むらと聞へてよといふ青柳まへ
 吾妻は居て京師は上りまこ吾妻踏まはるなれ研を定らぬまひ
 これらのゆもまへへおまげて今夜の宿をとりあ付小笹のま
 白痴うお今いあこ小栗との宿りもへ他人と一人なりとも泊に彼
 方をゆる思ふ鎌倉討手のゆたおり不れあてもあふらふらうの外を
 稟人も知はじといふ府肩輿の裡よりてりゆ外けを受まぬ奴家もか入
 解んと戸をおひひらき出る小笹の警れこれを見る挑本知て奴も其
 を會ひ敷きこく静くとま出り女を威めて猛らんと武將の内君
 までこれゆものぞ平伏をせ付女性に青柳の命は小笹を助け起し
 又忘れもまはるそのむじ此家あり豊婦の小笹をるを知らぬやといふ



錦と
著て
照天姫
万長が
家小
宿る

小笹の愕然と面を揚て窺ひ入るる昔年の似ねさぬまづら見えんもの
面ざしは早よりし玉を磨るるが斯やあらんとおもひ返りて小萩のつとて知り
はまごど其威よおそれ今さらし何とらふべき言語を胸裏に思ひ
その射照天云生るる奴家斯時主との養ひを受へ恩人といふ
れうらやと身を謙むる慌忙とそれを止めていひ生るる前日のこと知
さるる詮とさば今日既し知るるまゝいふてそれを做はるる願くは安夫婦が
難面はしなむしする罪を免し多ひまがこれよ上とては恩のあはじたづく
は免われしとま合して伏舞ひ照天のちあひこを其の實ともせざるに
おこらふ女児の奴家由志助重さよ遠ざかり思死よりいとせつねあはく
然と思ひ入ふ爾がとゆる我夫の勢を恐れぬる故あはくその置を死
目ん方の疏あはる程ども殿と奴家が妹背でありとけ誓の比よりも親と

親との許し受け結びおれたる赤繩うづら不圖妻家の乱あり夫婦別て
所在を知ると互に憂を思ひいふ今又故に復とて神や仏の憐みで
らうらりせりからぬ不義姪行をさるるの皇天いづく恵のあらわれらと
もても不義あぬる我猜して怨みぞしそえふ俱たり青柳のよは遠敷く
始終と物語折るる主方長一室の裡を結び出始終のよは渾身ぬいておんを怨り
さん今さら思は法儀やかる賤き生言をそん心も拙て只利のよと思はるる
あつら貴人かく下婢も追役使つる冥罰あて我女児を思ふ死なす
足も何ゆゑに欲より及ぶ人を女婿として未の栄利かえんものとのり
けは欲公の做事なれらうらうらお怒る我よありのを世も人も
はのいふ我妻よさら想をさるといひかつら小笹まこと雨の先非
悔と健言も悟るる今よりして夫婦法とも容貌をかへ前より

女児が菩提且我より此年以作り罪を亡く後世のいともみなをばさ
りゆふ万長をひの我の心後其の心れどもおろふ胸中いともあんと想
まや賢た心母のべとふの心焼くもきると夫婦先非を悔恨の心
公翫一菩提の道入りぬる情も又かきられ斯るところ母表のうこ
賑やく小栗判官代の出入と里長赤の立違ぐ照天姫のまうつら夫
まがら今日の徳倉討手の法大おんその入らせまふなるふ斯く居らんを
れまぐ公のまへも畏るれば奴家の別室母あつて後刺時を窺ひ夫より之
おとらぶるまはとふとらふ小母のまひて命至極道理なりいとも
やと前ま照天姫と青柳の二人を一室に誘ひける行もあせむ小栗助ま
近習の輩数十人成將て万長が許お入りしむの兵を青墓の驛
のちそれくの家お宿しなりいともの行いと捕けしむ各を処をばて

漸くお静まらなりなりぬれ時お助重侍臣お命ト主と信ひすつらと色と
いふ万長これを夢てこの前の報をせんなるん今いともあつる愛目
お逢おらんと地獄の餓鬼が熾王のゆきお牽はくくあて牽てらま
廣庭におそくも踏踏小栗これを通おえなりいとも万長おん忘はし我
今夜こらお宿るこらお罪をれんぬる今我いともあつる云解こらおせら
其罪を免く七汝利欲お追つたるのあま照天をひく娼婦おせんと
とらお照天節を失ふと法と命に随つとこれを故と謀をりうけ及は
娼婦お下一日毎七電の火を焚く七荷の水汲汲七電の草を刈
七桶の茶丁おらませり是一人の力おりてよく及ぶ処あるやいともあつるこの
弁下がこれを知り其任お堪ふを罪と強く倡婦おせんぬるしお照天が
親世音の仏力おびてはしお做らぬまき業を弁せりいともあつるたつと

不慮と云く其方小悪とて思拙とや云人暴悪とや云んがる非道と
 行ふて豈照天のころも人尚後人斯ははく人曾てまこ我世忍び
 居り時不圖とて申すれを女児が毫も溺れ我をりて女婿おせんと強
 らふりあをを辞まは禍忽ち及び宿志を果と妨かんと權お
 辱ふはらしうかひて我牙の素けを措けし辞がたをり非道
 行ひ人を不義に墜しり。是此不仁不義のり其罪正申す
 吾りと既万長が罪を正まうとて後背の紙門かお一閑ま
 我まを結多と云け出るをちえれ其妻の照天青折と小世
 借ひ申すなり小栗河のすひひびる我妻やおんを殿よりおま
 へま此あまらるぞ申すもどと回照天府よりけは命にまじ
 ぬ殿おはまきまのりを昨日人のしあを父は明日の殿このを宿り

ふりしあまはまは譯館のうらふ万長が許さば正しと罪と
 亂さんとおほをを精とれは夫婦助けはきまを俄もををたつ
 殿は前より世家よ宿の最ま主夫婦おも對面はて夫の怒か赤を
 やどと父とふおいと殊勝おも憐るまの殿おんて長夫婦が命助
 けして此群うらふ及べりとて小栗言語を正し怨をぬくその
 仇人を助るとかちて心を怒りて妻の心れをぬぐれ申すをりて死
 報ひ徳をりて徳報ゆと本文おもとては也。范睢が須賈おむし
 孫秀が石崇潘岳を報ひこれ恋を以てせり我又直き成りてせんと
 まるがでり止めらるも照天微笑ゆえその命實の道理なれと主
 を罪すかお奴家おむし刃びる縁故のここの權おも主は遊りて
 受し恩をさり又奴家長が許し居るはいつて君も再命せん恩



二つあり又女兒花見奴家と怨みて死亡し。爾日六もさるる奴家とを
 鎌倉とのへへ上女兒が仇を報くべきを爾るるはるは是此の思
 あり。それよりあはる長夫婦とぬをかへん意あり。此等のことな憐れ思
 夫婦を免させり。傳へて韓安國が獄史を免し。文滯公が其勤と怨み
 する人。渾これを賢くとも。今君登達門出。此夫婦のりのを助るる。この
 寛仁を傳へて招りたる人。帰伏せし強く夫婦と罪あり。奴家一旦の
 因は是も代とて思ひこめて。凍むが助重漸く活む。さるるはへ
 りありの。我意を遂へる僻とさるるが夫婦を罪に免し。入りの。長夫婦
 今我の。正をよく。善れ妻の嘆。あつても道理あり。自ら前非を悔。佛は
 志とて。う神妙あり。其罪を免せ。とて。佛門に入。女兒が後世と
 汝も。是とて。作り。悪業の消滅を祈へ。とて。万長夫婦。う。照天姫の

青柳も喜ひの。あて感。涕。其り。さるる小栗。その翌日。春日墓を。きて。鎌倉
 赴け。照天も。善。折を。傳へ。長夫婦と。袂を。別ら。夫の。殿を。慕ひ。も。さるる。長
 夫婦。小栗。小約。せ。り。く。青。属。財。宝。を。捨て。雲。深。の。衣。も。さるる。之。結。玉。の
 霊。場。を。巡。れ。女。兒。が。墓。口。提。且。の。又。之。の。後。世。の。營。の。外。又。他。て。や。り。り。じ。つ。
 悪。小。強。り。善。も。強。く。年。を。行。て。道。心。堅。固。の。知。識。と。り。終。小。大。往。生。を。遂。
 へ。人。且。流。小。栗。助。重。の。旧。悪。を。さ。るる。長。夫。婦。を。免。せ。し。と。寛。仁。大。度。の。大。ね
 こと。世。に。並。り。ふ。べ。し。仁。惠。の。慕。ひ。旗。下。小。池。を。さるる。勢。多。く。勇。威。破。行。の
 物。く。さるる。奈。困。の。決。候。小。差。系。信。徳。の。政。康。今。川。上。総。介。範。忠。武。田。守。計
 信。重。朝。倉。小。太。郎。教。景。亦。と。始。と。法。國。の。軍。勢。三。万。五。千。余。騎。召。軍。を。承。り。入
 下。知。さ。し。つ。と。も。家。教。持。房。小。栗。助。重。が。さるる。属。せ。し。か。既。に。勢。五。万。の。軍
 小。及。び。つ。ね。の。護。衛。中。騷。動。し。京。勢。只。今。責。入。を。や。し。俗。男。女。上。次。下。あ。り

りて返し資財雜物と西に運び東に隠し南北に走避し女童の泣けり
 巷も満小路もかまへり左馬路敷出陣の田舎の血もあつた武土も
 ありしほどよす連と初まわらせ女房達をばて候とてひ方あり只一
 ねに集ひて音小唄秋の虫のうて頼む草草も未拵て弱り果る公のうら
 警へ入方もさうりけりかたをわねの家枚憲実の討ちを對し一色式部浦詮秀
 同形給も浦對宗お属する軍兵三千餘達との河より落うせらん友人家子
 郎宗憲僅お七十金騎おぞぬは此小勢をてわつたて候と持氏公の陣
 小ぞ延もある持氏公お多ししくか係臆病りの味方ありて足すといひ
 うこそ宜れと宣されと秋の夕暁の困あ吹散され紅もあつた折も枝も同
 かくらる哀とあつたふたふたれる斯ての鎌倉のふもそそあはしく武義のふ
 高安寺の陣を引拂ひ鎌倉もて還り多しなる此附すても結城持朝の
 一人散るを忠我のやすてえられお持氏公も頼りく思密申へるあぢい
 我武運足すてとそおはゆこ身お替り命お代らんと契り人々も附運と窺
 自家の安危を慮り京軍お心をばし退りのすやて八九おお女志氣
 改めと便運の我お忠義とてとて娘もれ其忠公をて頼へき一ツあり今
 林おと唱めの耐よ至り了熱の軍して雑人のまにみ入る屍の上の恥辱お目
 深く自宝号入とと汝の我子義久と俱て何処おも立忍び耐の至と俣て世ま在
 まのよ是と最期のおとと汝はよこれと命をて持朝言流を正しこの甲斐入る命
 をゆるののぬいこの命と細うあゆみあらん某始よりあんと存せんと汝勢の
 おん限りの我言の聴るのを精し今日ての一言をもおへ上と柳此回の乱の
 起り一色詮秀お枚憲実と流し君を怒しなまよきよ依國家承の患と成
 ばれ速ふ一色詮秀をいお勢氣あつた忽ち軍家のい怒解京都鎌倉を
 け

りて返し資財雜物と西に運び東に隠し南北に走避し女童の泣けり
 巷も満小路もかまへり左馬路敷出陣の田舎の血もあつた武土も
 ありしほどよす連と初まわらせ女房達をばて候とてひ方あり只一
 ねに集ひて音小唄秋の虫のうて頼む草草も未拵て弱り果る公のうら
 警へ入方もさうりけりかたをわねの家枚憲実の討ちを對し一色式部浦詮秀
 同形給も浦對宗お属する軍兵三千餘達との河より落うせらん友人家子
 郎宗憲僅お七十金騎おぞぬは此小勢をてわつたて候と持氏公の陣
 小ぞ延もある持氏公お多ししくか係臆病りの味方ありて足すといひ
 うこそ宜れと宣されと秋の夕暁の困あ吹散され紅もあつた折も枝も同
 かくらる哀とあつたふたふたれる斯ての鎌倉のふもそそあはしく武義のふ
 高安寺の陣を引拂ひ鎌倉もて還り多しなる此附すても結城持朝の
 一人散るを忠我のやすてえられお持氏公も頼りく思密申へるあぢい
 我武運足すてとそおはゆこ身お替り命お代らんと契り人々も附運と窺
 自家の安危を慮り京軍お心をばし退りのすやて八九おお女志氣
 改めと便運の我お忠義とてとて娘もれ其忠公をて頼へき一ツあり今
 林おと唱めの耐よ至り了熱の軍して雑人のまにみ入る屍の上の恥辱お目
 深く自宝号入とと汝の我子義久と俱て何処おも立忍び耐の至と俣て世ま在
 まのよ是と最期のおとと汝はよこれと命をて持朝言流を正しこの甲斐入る命
 をゆるののぬいこの命と細うあゆみあらん某始よりあんと存せんと汝勢の
 おん限りの我言の聴るのを精し今日ての一言をもおへ上と柳此回の乱の
 起り一色詮秀お枚憲実と流し君を怒しなまよきよ依國家承の患と成
 ばれ速ふ一色詮秀をいお勢氣あつた忽ち軍家のい怒解京都鎌倉を
 け

神戶藏書記

水奥の山中より入るる人必定て其の這回の討まに小栗助重なるなりこれ
前年此幼きときより小栗満重が男兒の君の近習ふひ一者なれば
召あらん彼の老より父は其の死の君の心より奔りしあはれ一色清言
お依りて詮秀を討んごうあまうる難苦勞心してお軍家の免を
とらん其の使をせかり助重が陣より詮秀は幼きことを速君の赤を
語りぬる喜んで京鎌倉の和睦を整平一国家安全に討ひて
色悪事と見えぬと持氏とてとめて一色が悪行を思ひ
のちま色とてとて

小栗外傳卷之十四 畢

水奥の山中より入るる人必定て其の這回の討まに小栗助重なるなりこれ

前年此幼きときより小栗満重が男兒の君の近習ふひ一者なれば

召あらん彼の老より父は其の死の君の心より奔りしあはれ一色清言

お依りて詮秀を討んごうあまうる難苦勞心してお軍家の免を

とらん其の使をせかり助重が陣より詮秀は幼きことを速君の赤を

語りぬる喜んで京鎌倉の和睦を整平一国家安全に討ひて

色悪事と見えぬと持氏とてとめて一色が悪行を思ひ

のちま色とてとて

